

審査の結果の要旨

氏名 森山葉子

本研究は 20 歳以降の体重変化が、BMI や前年から 1 年間の体重変化の影響とは独立に、脂質異常症発症と関連するかを検証したものであり、以下の結果を得ている。

1. 労働者を対象とした質問票調査および定期健康診断のデータから、35～55 歳の男女 6,679 人（男性：1,681 人、女性：4,998 人）のうち、ベースライン時の脂質異常症有病者は男性 829 人、女性 1,326 人であり、有病割合は男性 49.3%、女性 26.5%であることを明らかにした。
2. 脂質異常症の発症を従属変数、20 歳時からベースライン時までの体重変化を独立変数とし、ベースライン時の BMI で調整したロジスティック回帰分析を横断的分析として男女別に行った。2.5 kg未満の体重変化を参照群とし比較したところ、男性では 2.5 kg以上 7.5 kg未満の体重増加、および 7.5 kg以上の体重増加で脂質異常症は有意に多く、女性では 7.5 kg以上の体重増加で脂質異常症は有意に多いことを明らかにした。
3. 5 年間の追跡調査から、脂質異常症の発症を従属変数、20 歳時からの体重変化を独立変数とし、BMI および前年からの 1 年間の体重変化で調整したロジスティック回帰分析を縦断的分析として男女別に行った。2.5 kg未満の体重変化を参照群とし比較したところ、男性では 2.5 kg以上の体重減少した者において脂質異常症発症リスクが有意に減少し、女性では 7.5 kg以上の体重増加をした者において脂質異常症発症リスクが有意に高いことを明らかにした。
4. 3の結果、女性において、20 歳から 7.5 kg以上の体重増加者は 2.5 kg未満の体重変化者を参照群とした場合、脂質異常症発症のオッズ比は 1.35 であり、前年から 1 年間の体重変化（連続量）のオッズ比は 1.04、BMI（連続量）のオッズ比は 1.07 であり、いずれも脂質異常症発症と有意な関連を示したが、20 歳から 7.5 kg以上体重増加した者のオッズ比が一番高く、1 年に 1 kg体重増加することや BMI が 1 kg/m²高いことより、脂質異常症発症リスクを高めることに寄与していることが示唆された。男性においては、7.5 kg以上の体重増加者は 2.5 kg未満の体重変化者を参照群とした場合、脂質異常症発症と有意な関連は示さなかったがオッズ比は 1.51 と高かった。前年から 1 年間の体重変化（連

続量) のオッズ比は 1.13、BMI (連続量) のオッズ比は 1.10 であり、いずれも脂質異常症発症と有意な関連を示したため、これらの脂質異常症発症のリスクを高める影響が大きい。20 歳から 7.5 kg 以上体重増加した者のオッズ比も高いことから注意を要する必要性を明らかにした。

以上、本研究の結果から、20 歳以降の体重変化が、BMI や前年から 1 年間の体重変化の影響とは独立に、脂質異常症発症と関連することが示唆された。これまでに青年期以降の体重変化と脂質異常症との関連を検討した研究は少なく、いずれも発症ではなく有病者についての報告である。また、本研究では最近の短期の体重変化を調整した上で、20 歳からの長期の体重変化と脂質異常症発症が関連することを明らかにした。本研究は、動脈硬化性疾患の危険因子として予防が必要な脂質異常症に対し、その発症に関与する因子の解明ならびに予防活動に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものである。